

# 大庭みな子の詩と短歌

——呼び戻される記憶——

佐藤裕子

## 一 大庭みな子文芸の原点

大庭みな子の生涯と文学的営為を考える時、その最晩年の著作が、死後出版されたエッセイ集『風紋』と未完の小説『七里湖』を除くと、『浦安うた日記』、『大庭みな子全詩集』<sup>(1)</sup>で、小説(散文)ではなく、短歌と詩(韻文)であったことは重要である。『大庭みな子全詩集』のあとがきで、氏は次のように語っている。

私が世に受け容れてもらったのは、三十七歳のときの小説「三匹の蟹」からで、以後はもっぱら小説というかたちを仮りて作を成してきたが、間違いなく私の文学の発端は詩作だった。十代の頃である。

その後も十年ほどは詩を書くことが自分の資質に相適しい営為だと信じ、その一方で先行き散文を書いていくために欠

かすことの出来ないエチュードだと考えて、折にふれ内部から衝き上げてくる言葉を詩のかたちで書き留めていた。その意味で、私の文学の源泉に詩があるのは明らかであり、秘かに「私は詩人だ」と思い続けてきたフシさえある。

『大庭みな子全詩集』の第一部(二九五〇〜一九七二)冒頭「錆びた言葉」に収められた詩の一篇一篇から、氏の小説世界への扉が開かれたとすれば、一九九六年七月一三日、脳血栓で倒れ、脳梗塞を併発し、左半身不随のまま十一年間の闘病生活の日々のリハビリとして編まれた『浦安うた日記』では、病いのために失われた肉体的機能と、記憶を取り戻すかのように、大庭みな子夫妻が二人で歩んできた日々を回想する姿勢が貫かれている。

今のナコは車椅子で、立てもしなければ歩けもしない。色  
の見えない病人になった。トシの姿が一瞬でも消えると大き

なお化けに怯える。でもトシの日記を聞いていると歩けた頃のナコがいる。だからナコは生き返る。トシがいれば生き返る。ここからは、回想が、単なる過去の想起であることを超えて、過去の記録である日記が声に出して朗読された瞬間に、過去の時間が呼び戻され、取り戻された時間と記憶の中で、「今」という時間を生きるための装置として機能していることに気付かされる。伴侶の存在と、伴侶の日記を支えとして、過去を（今・現在）に蘇らせるために「うた（短歌）」が選び取られているということである。

本稿においては、大庭みな子文芸のその源泉にある初期の詩作品と小説世界との関連を確認しつつ、その生涯の最後におかれた短歌の世界の内実を探ることで、大庭みな子文芸と生涯の足跡を確認したい。

## 二 『大庭みな子全詩集』の世界

『大庭みな子全詩集』は二部に分れており、第一部では一九五〇年から一九七一年までの作品が、また第二部では一九七二年から二〇〇五年までの作品が収められている。

第一部「錆びた言葉」に収められた詩のタイトルは次のとおり。「林」、「蒼い言葉」（秋日／こわれる／男に／あけがたに／憎しみ

／ジュラルミンの指／うまくゆかない恋／砂丘／悪夢／別れ／ジギタリス／蒼い領布、「雲と薄」（武蔵野 春の花／武蔵野 秋の花／立川風景／日本の街／機械の向うの風景／黒い汚点／苔寺／雲と薄／矛盾への憧憬／地上の階段）、「江戸川風景」（会話／殺人の街／榮養士になりに夜間高等学校に行く少女／春菊／ニコニコ座の娘／ミヨちゃん）、「つばめ」（ビキニからやってきたつばめ）、「新生」（恋の甕／毒薬／かひこ／新生／海月／妊娠／指／浜辺の恐怖／自由の喪失）、「錆びた言葉」（春日／鮭／消えた色／懶惰な欲望／暮し／かたおもい／錆びた言葉／無人島の夢）。

また、第二部に収められた詩のタイトルは次のとおり。「むかし女がいたより」「炎える琥珀より」「雲を追ひより」「拾遺詩篇」（ガラスの球／王女の涙／ゆく舟／「絵姿女房」から／「瓜子姫とあまんじやく」から）。

これらのタイトルからも、大庭みな子文芸に底流するテーマと方向性が内包されていることが理解できるのであるが、例えば一九五四年一月二二日の日付の「悪夢」は次のようである。

黒い血の色

しらみ しらみ しらみ

涙腺にうずくまり

鼓膜を噛み

涙汁をねぶる

しらみ しらみ しらみ

脳髓の血の中でしらみが泳いでいる

口の中に しらみがいっぱい

膿みただれた原爆患者の乳首のように

ふくれあがった唇に這うしらみ

舌の上に 無数のいぼのようなしらみ

一本一本の髪の毛に

メデューサの蛇のように

鎌首をもたげるしらみ

しばしば指摘されているように、一九三〇（昭和五）年生まれの大庭みな子にとって、小学校入学と共に戦争が始まり、思春期の只中である一五歳の時に終戦を迎えていることから、戦争体験、とりわけ広島県西条町の陸軍被服廠での勤労働員の最中に広島市に投下された原爆のきのこ雲を目撃した経験と、その後被爆者救済のために爆心地近くで過した二週間の経験は、筆舌に尽くしがたい凄まじいものであったことは想像に難くない。後に氏は、繰り返しこの時の記憶について、エッセイ等に書き記している。

あまりに強く絶望したので、あらゆる絶望に対して強くなくなり、生きつづけるただ一つの方法は執念深く絶望をひき起こ

すものに反逆しつづけることだということも悟ったのである。

（「亡霊」昭和五〇年四月）

ここで際立つのは、それらの記憶に打ちのめされながらも、それらの記憶を相対化することでそれらと真正面から対峙する姿勢である。

また一九五三年八月二日の日付の「ジギタリス」は次のようである。

ジギタリス

聖母マリアの指

狐の手袋

その薄紫の釣鐘の中に

私の恋を

とじこめてしまいたい

心臓が破裂するまで

この詩には、『牧野植物図鑑』からの「ジギタリス」の項目も併せて記載されており、「聖母マリアの指」「狐の手袋」は、ジギタリスの別名である。これはアラスカ・インディアン（風習や伝承に題材を採った「火草」（昭和四八年）にも登場する。「雷鳥」の二人目の妻でありながらその甥で後継者の「鶉」と関係し、あまつさえ子供を身籠った女「火草」を、結局は父と甥と、そして「雷鳥」

の老いた妻「沢の女」の暗黙の結託によって食事中に、口直しの芹や野苺の中にそつと混ぜられたジギタリスによって、女は心臓が破裂して死に至る。

「雷鳥」は妻の「火草」の猛々しいまでの食欲を目の当たりにして、次のように考えている。

脂で光った唇をなめずりながらうずくまって餌に熱中する火草を眺めると、不意に雷鳥は動物に立ち向う時の恐怖のまざり合つた絶望、つまり、猛り狂つた獣はどのようにしても決して言葉などでなだめられるものではない、といった絶望を感じた。と同時に、唇の両脇から赤い汁をたらして肉を喰つているその女を超自然的な神々しさで調伏したい、という魔術師の悲願を雷鳥は持った。雷鳥は眼を伏せて悪魔を調伏する魔術師の指で、きつい香りの野芹の中に濃い緑のちぢれた草を摘み入れた。鹿が決して食わない草、ほんの少量むくんで動悸のする病人に与えれば、そのむくみをとり除き、正常な心音をとり戻すが、多くを与えれば必ずその心音を消す魔の葉草である。

ここからは、単に甥に若い妻を寝取られた男の嫉妬などというものを超え、若い妻の旺盛な食欲に漲る生命力への憧憬と、自分ではもはや制御不能の猛々しいまでの彼女の生命力への畏れがあ

る。そしてそれが後継者たる甥や一族へ災いをもたらす前に封印するべく、雷鳥は火草を大量に野芹の中に混ぜ、火草に与えるのである。江種満子氏の指摘するように「テクストはプロット全体をあげ、火草の旺盛な生き方が、共同体の暗黙の策謀によって消去されたことを悼んでいる」のである。

また「雲と薄」の中の「武蔵野 春の花」（一九五〇年四月）と「武蔵野 秋の花」（一九五〇年一〇月）は次のようなものである。

#### 武蔵野 春の花

草ばけ、頬の赤い端女、  
すみれ、病気で婚期をはずした娘、  
筆竜胆、何ごともわきまえている女、  
土筆、倅せな少年、  
はこべ、健康な暮らし、  
おおぼこ、執念、  
たんぼぼ、天真爛漫に見える油断のならない少女、  
ほとけのぎ、愚痴、  
きんぼうげ、乱雑、  
なたね、なげやりなおんな  
野せり、誇り高い子男、  
くぬぎの若葉、ものやわらかな人、

えこの木の若葉、わけのわかった人、

武蔵野 秋の花

秋のきりん草、いや味を言わずにいられない女、

二葉萩、世に容れられない不運な男、

山城菊、追従者、

荒野の菊、へまばかりする女、

秋のたむら草、流刑にされた女官、

すすめのひえ、諦めのよい庶民階級、

やは草、こまかい男、

はいどく草、野心的な友人の悪口を言う男、

ひめてんつき、気の弱い女、

あしほそ、いつもしもやけのできる女、

ささがや、恥じている病気を持つ女、

げんのしょうこ、言いつのる男、

尾花、ずるい男、

女郎花、利口な女、

吾木香、あつさりした流し眼、

藤袴、ふられた女、

りんどう、氣丈者、

どくだみ、怨念、

みずひき草、細い静かな声で、思うことを終りまで言う女、

桔梗、つんとした、自信家、

なでしこ、気ばかりつかう女、

葛、忘れられないもの、

しのぶもじずり、気の利く娘、

これらの二つの詩からは、氏の津田塾大学時代の、豊かな自然に囲まれた武蔵野での寮生活の中で育まれた植物や動物といった命あるものへの共感感情と、感性をうかがうことができる。

以上、引用した初期の四つの詩に限定しても、そこには戦争・広島体験・原子爆弾、あるいはアラスカ体験・男と女をめぐる様々な駆け引き・孕むこと・自らの女としての肉体に潜む過剰なまでの生命力と意識など、大庭みな子文芸の核心に潜む様々な問題意識を見て取ることができる。これらのテーマのうち、とりわけ四季の移ろいと、それぞれの季節の花や木々に寄せる氏の想いは、最晩年の『浦安うた日記』にもあますところなく、投影されている。次節では、『浦安うた日記』の世界を探りたい。

三 『浦安うた日記』の世界

前述したように、一九九六年七月十三日に脳血栓で倒れた大庭

みな子は、二カ月後の九月二〇日に脑梗塞を併発し、左半身不随となり、車椅子生活を余儀なくされることとなる。『浦安うた日記』の「あとがき」によれば、発病後見舞いに来てくれた高木有氏の勧めで「リハビリには短歌を考えるのが一番」とのこと、浦安うた日記」を『短歌研究』に連載することとなった経緯が綴られている。前述したように、ここでは病を得た妻とそれを看病する夫の二人の日常に加え、二人で歩んできた過去、二人を取り巻く人々の記憶と回想が描かれている。

物語は、「ゆるゆると」「ふるさとは」「第二のふるさと」「ゆずり葉」「同行二人」「ミツクリ」「さくらます」「江田島」「八月忌」「食べ物のお糸」「花野」「ぎんなん」「あらたまの年」「ハワイ島紀行」「春を想う」「逝く友、来る友、語る友」「花ふたたび」「ゆく春」「梅雨の間の思い」「七夕のころ」「八月の記憶」「終りの蜜月」と、十二の章に分れている。

「江田島」「八月忌」「八月の記憶」では、広島島の原爆と太平洋戦争のことが、また「ふるさとは」「ゆずり葉」「食べ物のお糸」「春を想う」「花ふたたび」では、父親・母親・姉・妹など、家族の記憶が、また「江田島」「春を想う」「梅雨の間の思い」「逝く友、来る友、語る友」では、小学校時代の同窓会のことや、津田塾時代の友人たち、また作家仲間の思い出が語られている。「第二のふる

さと」「ハワイ島紀行」では、まさに氏の第二のふるさとともいえるアラスカ時代・アメリカ時代の記憶や、病を得た後に訪れたハワイ旅行での徒然の想いが綴られおり、残りの章「ゆるゆると」「同行二人」「ミツクリ」「さくらます」「花野」「ぎんなん」「あらたまの年」「ゆく春」「七夕のころ」「終りの蜜月」では、もっぱら大庭みな子とその夫君利雄氏の夫婦二人の日常が語られている。

それにしても、大庭みな子にとっての夫君利雄氏の存在とは、妻が小説家としての仕事を存分に全うすることができるようにとの思いから仕事を辞めて妻の秘書となり、生涯妻を支えたというだけでも十分時代を先駆ける存在であるのみならず、妻が病に倒れて以降、十一年に及ぶ闘病生活を献身的に支え、最期を看取ったのである。『浦安うた日記』に描かれる日常とは、互いに健康が守られていて、その上で過去を回想するという行為以上のものが存在することは疑いもない。

人生の終りに近づき、来し方行く末を考える時、しかもそれが、誰かの介護なしに日常生活を営むことが不可能な場合、絶望のみが去来するも当然のことと思われる。歩くことも、立つこともかなわず、入浴から下の世話まで、誰かの手を煩わせ、しかも食事の支度もままならず、誰かに作ってもらったものを、誰かの介助で食べるということが、病人の健常者であった頃のプライドと尊

敵を著しく傷つけるものであることは忘れてはならないだろう。加えて、たとえ痛切な悲しみの只中にあると、たとえ身を切るような苦しみの只中にあると、時間が経てば空腹となり、咽喉の乾きを覚えるのが人間である。そのあたり、氏はユーモアにくるみつつも、利雄氏との日々を次のように語っている。

「セカンド・ハネムーン」と二人で呼んでいたのだが、編集者は「終りの蜜月」という題名を与えてくれた。これも悪くない。「サード・ハネムーン」はあるとすれば、それはあの世のことだから、今は確かに「終り」の蜜月に違いない。

他人の目からみたらあわれな、みじめな「蜜月」かもしれないが、楽天的なトシはすべてを楽しみに変えてしまう魔術師だし、ナコもその魔術にかかって自分を幸せに思っている。そういう暮らしを歌にもならない歌の口調にしてナコは口ずさんでいる。

日に三たび食事湯浴みに手洗いと夫に乞う身のいのちう  
とまし

ゆるゆると恋にまみれて夫と生きついの棲家の浦安に住  
む

夫の押す車椅子にてピフテキと大福買う日は秋の雨降る  
恋い恋いて恋に死なんん夢を見て夢に生きるか今日この

ごろは

世界には奈児と杜詞のみいるらしく語る言葉は奈児語と  
杜詞語

五首目、長い年月を共に暮らした夫婦の会話が、「あれ」とか「それ」とか「これ」など、指示語が多くなることをうたったもの。また一首目、二首目は、小説家としての仕事のサポートのみならず、生きること全てのサポートを担うものとなった夫への全幅の信頼が伺えるものである。さらに氏は次のように語る。

それにしてもどうしてトシはこうもナコに優しいのだろう。  
トシは言う。

「人間は手を使えることで男女の関係が狂ってしまった。動物は本来雌が迎える気にならない限り、雄は雌の相手になつてもらえないのに、手を使う暴力をもって雌を犯すことができるようになってしまった。大脳があつて余計な知恵もあるから、社会とか経済とか、雄に都合のいいようなシステムまで作って、自分の気に入らぬ雌まで自分の物にしてしまう。これもまた手を使うのと同じ暴力である。気に入らぬ雄の子供まで産まねばならぬ雌は一番あわれた。男どもはこの根本のところを考え直さなければ、結婚をしない女が増えたとか少子化だと騒いでも問題は簡単には片付くまい。」

トシは本当に女好きなのだ。世界中の女をすべて愛して同情しているに違いない。だからナコ一人の女に満足しているというよりは、ナコという女を落胆させないためにナコに縛られて他の女に手を出せないでいる。トシのこういうことばは半信半疑で聞いてきたが、ナコが悲運に落ち込んだ今になってその言葉が信じられるようになった。不幸中の幸いとはこういうことなのだ。

おそらく、大庭みな子の作品世界が、女性性をめぐる被害者意識から自由で、女も男も相対化して大らかで伸びやかな作品世界の根源には、妻の才能を心から尊敬し、その支えとなつて尽くすパートナーとしての利雄氏の存在がある。生涯を共にする中で、刺激と影響を与え続けた結果でもあるといえるだろう。「半世紀の昔にできた目のまわりの黒痣も、おたがいに刺し交わした言葉の矢尻も、今となつては二人の間を結ぶ懐かしい思い出」と語る時、あるいは「大いなるトシの悩みは果てしなく終わることのない三度の食事」「終わりなき介護に疲れる夫あればわれ旅立ちを祈るばかりよ」とうたう時、病を得た病人の絶望と辛さと、それを看病する人間の絶望と辛さと、その絶望と辛さをかこつ前に日々の営みが押し寄せ、その中にとりまぎれつつ、互いの存在を確かめ合ひ、支え、支えられながら生きてきた歳月の重みを感じさせる。

まさに、「終りの蜜月」とは、人間の欲望の一切合財を削ぎとつて、残り少ない命を愛おしむ只中にこそ現れるものだということである。

回想されるのは、そればかりではない。かつては理解できなかったことは、今は理解できるという痛切な思いをもつて語られるのは父のことであり、母のことである。

亡き父三郎については、好物の「うなぎ」の話から始まる。「食べ物にそれに連なる人の様と思ひ出を抱き合わせにしてしか味わえない」と、氏は語る。以下、七首。

うなぎ食む弟の顔見て思う在りし日に同じ顔してそれ食みし人

父の話はうなぎにとろろ 栗、椎茸に、鮪と鰹

母の話は鯛の洗いに ヒラメのえんがわ、かき雑炊

トシの話は鮭の釣り あわび、はまぐり、秋のバッテリー

栗はめば父しのばるる在りし日のうしろ姿の時雨れてけむる

栗飯の秋ぞ来るとほのめかす父聞き流しし悔いのこる吾すり鉢を抑えた日々の恋しさに三杯目かやとろろ汁吸う

父の大好物だったとろろ汁や栗ご飯を、出身地の違う母はなかなか作らなかつた。

母なきあと父は娘にもそれとなく要求したが、ナコは忙しさに紛れて父の望みを叶えられなかつたのを秋になると悔いがよみがえる。

二首目と三首目、父の魚の好みか赤身の鮪と鰹だとすると、母の好みは白身の鯛とヒラメである。正反対の好みからして、「母がなかなか作らなかつた」のもうなずける気がするのだが、それを娘である自分は、今度は忙しさを理由に作らなかつたというそのことを、今は後悔と共に季節の味を味わうというのである。

母の記憶は次のようなものである。

今日もまたリハビリの帰りに同じ道の同じゆずり葉の木の  
下に母がいるのを見つける。母はよくゆずり葉の木の  
下に立つて、「ゆずり葉は新芽が伸びれば古い葉は落ちる」と  
人だつた。

ゆずり葉の新芽ふくらみ古葉舞う若やぎし母はそよ風に  
笑む

ゆずり葉のめぐる生命の膨らみて古き葉は逝く祝ぎ歌と  
ともに

春うららゆずり葉の柄の紅さます若き芽伸びて古き葉は  
落つ

母と娘とは、同じ性を持つがゆえに、一番よく相手の考えてい

ること、感じていることが見えてしまうという厄介な関係にある。仲が良ければ良いなりに、あるいは理解しえない溝を抱えているのであればなおさら、愛憎もひとしおとなるのであろう。

ナコは少女のころ逢引をするように誰かを待つて立っている母を見かけて騒いだ胸を抑えて立ちすくんだことが何度かある。相手の男はナコも知っている人で、ごくありきたりの人だつたが、人生の終りにはこういう風景があるとナコに思わせるような人だつた。多分そのころからだつただろう。ナコが小説などというものを書き始めたのは、なぜか最近会う母の姿はそのころ出逢つた母の姿を思い出させた。母は下手な恋歌めいたものを添えた書き損じのラブレターの切れ端をその辺りに投げ出しておくような人で、ナコは母親のそういうものを拾つて入念に細かくちぎつて捨てた。父親がそれを目にすると必ず夫婦喧嘩が始まるのを恐れてのことだつた。その思い出は人生の終りの怪しい風景の中の一部である。

恋すてふ名のたつときを恋うてあり恋に遠きを嘆く身に  
あれば

リハビリの帰りの道、「ゆずり葉」の木の下に母の姿を幻に見る時  
母の叶えられなかつた全ての思いと共に、母が想起されている。  
母の若き日の恋が、本当のものだつたのかどうかはもはや問題で

はなく、〈恋に遠くなつた自分を嘆く母の姿の意味〉が、氏には見えているということであろう。

母はそのころよく言った。「親に向かつてよくそんな口が利けるね。私があんたぐらいのときはそんな言葉を思いつきもしなかつたものだ」「まあ、いいでしょう。そのうちあんたが今言つたようなことを自分の娘に言われるようになる」

思い出は母といさかい吾は勝ちて母泣きぬれぬ若き母なれ  
気がつけばわが娘そこにありて吾に挑むわれ泣きぬれぬ母  
を思いて

ゆずり葉の紅い葉の柄は空に舞い地に下りたちて紅く涙す  
母の夢母の欲りしものはなに分かつたぬまにわれ年老いぬ  
古くなつたゆずり葉が、新しい葉に取つて代わられる時、それは新しい生命の息吹の時でもある。母が叶えられなかつた思いは、母から娘へ、娘からまたその娘へと、連綿とその情念と共に受け継がれてゆく。この命の息吹こそ、氏がその人生をかけて書き続けてきた作品の中に結晶されているといえるだろう。

## 結び

一において指摘したことであるが、記録すること・書き記すことは、記憶の確認であり、「思い出を食み、思いでを飲む」行為で

もある。そして改めて、その時間を生き直すことこそ、この『浦安うた日記』で描かれていることである。夫利雄氏の献身に加え、半身麻痺と記憶障害を乗り越えて、なお表現することを手放すことなく、自らの生の在り様を見つめる強靱な魂がそこにはある。まさに大庭みな子氏の生涯の文学的営為を証しだてるものとして『浦安うた日記』が存在するといえるだろう。

註 (1) 大庭みな子『浦安うた日記』作品社、二〇〇二年十二月

(2) 大庭みな子『大庭みな子全詩集』めるくまーる、二〇〇五年五月

(3) 江種満子『「花草」の世界』『大庭みな子の世界—アラスカ・ヒロシマ・新潟』新曜社、二〇〇一年一〇月

(本学教授)